
令和3年

8月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下10農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

ぎふ農業・農村を支える人材育成

東農農林■冬春トマト・新規就農者 経営検討会

8月24日、海津市の就農支援センターでトマト栽培を学び管内で就農した農業者を対象に、伴走支援サポート体制計画の一環として経営検討会を開催した。

市場におけるトマト単価の低迷は経営に大きな打撃を与えており、関係者は支援方策に頭を抱えている。まず、農業者から前作の反省点を述べてもらい、支援する関係者からは改善点などを助言した。就農支援センターで学んだ知識を最大限に活かすとともに、厳しい状況のなかにおいてもやれることを少しずつ改善していかうと話し合った。

安定的な農業経営を行うことは理想ではあるが、他産地の拡大や出荷期間の長期化などは、市況へ影響し問題となっている。農業普及課は、厳しい状況ではあるが農業革新支援センターの助言を受け、さらに関係機関と連携して農業者を支援していく。



【関係者でハウス内を視察】

恵那農林■集落営農・スマート農業 リモコン草刈機等の試用・操作体験実施

県スマート農業機械・機器貸出事業が拡充され、中山間農業研究所中津川支所でも期間限定ながらスマート農機が身近で手軽に借りられるようになった。これを受け、8月13日から27日にかけて、中津川市加子母地区の(農)角領営農、同市福岡地区の(農)はちたか、恵那市串原地区の串原スマート農業推進協議会において、各種リモコン草刈機の営農組織での試用や個人生産者向け操作体験会などが実施された。

8月22日、加子母地区で地区内生産者を集めて操作体験会を実施した。参加者から「草刈能力が高く、静寂性も兼ね揃えている」との評価の声が多数出された一方で、「急傾斜畦畔の多い中山間地域では、水路等への滑落も心配されるため、使用場所と機械を使い分けての作業が必要」との意見も出された。

スマート農機は高額であり簡単に導入できるものではないが、まずは試用や操作体験により技術を理解したうえで、導入判断することが大事である。農業普及課では、今後もこうした事業活用を促しながらスマート農業技術の現場普及を図っていく。



【リモコン草刈機の試用・体験】

下呂農林■農福連携 農福連携下呂地域連携会議を開催

8月17日、下呂農林事務所主催で農福連携下呂地域連携会議を開催し、市内の福祉事業所や関係機関17名が出席した。

昨年度から就労継続支援A型事業所より障がい者の派遣を受けているトマト農家の状況を視察した。トマト農家から、7～9月まで3名に週2～3日来てもらっていること、トイレを設置したこと、休憩場としてコンテナハウスを今後設置予定であること、更に管理作業に手が回ったためトマト単収が増加し農業所得向上につながった等の話があった。

その後、下呂特別支援学校にて情報交換を開催した。福祉事業所からは、農作業現場の労働環境の整備が必要であることと、従業員も含め雇用する側に障がい特性を知って欲しい、そのための資料提供や勉強会開催も可能である等の意見が出た。

農業普及課では、今後も農業経営に必要な補助労力が確保できない現状を、福祉事業所等と連携しながら解決し、農家の経営安定につながるよう支援を継続していく。



【農福連携の取り組みを語る】

飛騨農林■農福連携 トマトの箱詰め等を行う福祉事業所を訪問

8月4日、農福連携の取組みをしている高山市三福寺町の福祉事業所「きららハウス」へ、飛騨県事務所福祉課の農福連携担当者と共に訪問し、農業と福祉のお互いのニーズの情報交換を行った。

きららハウスでは令和2年度から、農家団体「THAT」のトマトの箱詰め作業等を受託しており、今年度、初日の作業を視察した。THATは若手生産者を中心にトマト、パプリカ、桃等を栽培し共同で出荷する団体である。きららハウスでは約1年ぶりの作業ではあったが、トマトの仕分けや箱詰めをスムーズに行っており、ほかの作業もあわせて10月末まで継続される予定である。

農業普及課では、引き続き農福連携の取組みについて、関係機関と連携して支援していく。



【トマト箱詰め作業の視察】

革新支援センター■女性の活躍 ぎふ農業・農村男女共同参画推進会議で意見交換

県では、令和3年3月に新たな「ぎふ農業・農村男女共同プラン」を策定し、農業分野における男女共同参画推進に取り組んでいる。

8月23日、オンラインで「ぎふ農業・農村男女共同参画推進会議」を開催し、農業者団体、関係団体、行政機関の関係者約40名が出席した。会議では、プラン内容を確認するとともに、それぞれの活動状況や今後の取組計画等について情報交換を行った。特に、女性認定農業者の育成、女性農業者のロールモデルづくりについて、優良取組事例や各地域での取組方針、ロールモデルづくりの意義や活用等について理解を深めることができた。

引き続き、それぞれの立場や地域で男女共同参画に取り組み、一人ひとりが輝き男女が共に築く新時代の農業の実現を目指す。



【オンラインで意見交換】

安心で身近な「ぎふの食」づくり

岐阜農林■水稲・水田農業担い手連絡協議会 研究交流会にてウェブ研修を実施

8月4日、JAぎふ本店など5会場において、JAぎふ水田農業担い手連絡協議会の研究交流会が開催された。新型コロナウイルス感染拡大防止のためウェブ開催となり、計100名の関係者が参加した。

研究交流会では農業普及課、県農政部スマート農業推進室、JA全農岐阜、JAぎふの担当者が講師となり、米穀に関する生産技術や流通動向、スマート農業などについて研修が行われた。農業普及課からは、昨年大きな被害をもたらしたトビイロウンカの生態と対策について説明するとともに、今年度管内各地で実施している払い落とし調査結果について報告した。出席した会員はトビイロウンカの発生動向に高い関心を持っており、熱心に聞き入っていた。

農業普及課では、トビイロウンカ・斑点米カメムシ類・いもち病などの防除指導を行い、令和3年産米の単収および品質の向上を支援していく。



【ウェブ研修の様子】

西濃農林■いちご ぎふ清流GAP取得支援

8月11日に、管内のいちご経営体で、はじめてのぎふ清流GAP取得を目指す輪之内町の(株)令和農園を対象に、点検項目に基づく内部審査を行い、書類の内容確認や出荷調整作業所・倉庫の衛生管理などについて指導した。GAP取得に必要な生産出荷施設の改修や備品の購入、残留農薬の自主検査に要する経費を補助する県単事業（GAPチャレンジ推進事業費補助金）の活用を図りながら、本年度2回目の申請受付（8月～9月）での書類提出、農場評価（10月～11月）に向けて、今後も支援することとしている。

農林事務所では、ぎふ清流GAP取得に向けて取り組む農業者を積極的に支援していく。



【GAP内部審査の様子】

中濃農林■なす ぎふ清流GAP評価制度の自己点検・改善活動の支援

8月11、12日に、管内のなす生産者2名に対して、GAPの自己点検活動の支援を行った。

ぎふ清流GAP評価制度の管理項目に沿って、栽培履歴、在庫管理等の書類や農薬保管庫、圃場等を生産者と確認した。農業普及課からの指摘により、今まで生産者の目につかなかったリスクが見つかり、意見交換しながらよりよい改善策を見つけることができた。この生産者は、今後ぎふ清流GAPの評価を受ける予定であり、更なるリスク改善に取り組んでいく予定である。

農業普及課では、今後も関係機関等と連携しながら、食品安全や環境保全、労働安全等に配慮したGAPの推進を進めていく。



【GAP点検の様子】

郡上農林■水稲 郡上産米ブランド化研究会が現地研修会を開催

8月10日、郡上産米ブランド化研究会の現地研修会が白鳥町内にて開催された。この研究会は、良食味米生産や販売に関する調査、会員相互の情報交換を目的に平成28年に発足、これまで郡上おいしい米コンテストや全国コンクールに上位入賞を果たしている。

農業普及課から、これまでのコンテスト結果から得られた良食味米のための栽培管理ポイントを解説した。その後、現地にて食味向上と環境保全を目的とした生分解性一発肥料「米の極み」によるコシヒカリ栽培や、作期分散のため導入を検討している新品種「ほしじるし」の高標高（海拔約400m）実証ほ場を視察した。

農業普及課では、今後も研究会の活動支援を通じて、郡上地域における良食味米の生産振興を進める。



【実証ほ場にて意見交換】

可茂農林■水稲 水稲の不稔要因に関する調査

昨年度、管内の水稲の収穫期に不稔籾の発生が確認され、減収が著しいほ場も見られたが原因の特定には至らなかった。農林事務所では本年度、原因究明のため高温等の気象要因、いもち病等の病害及びカメムシ類等の虫害について、管内で14か所の調査ほ場を設定し毎旬の調査を行っている。

不稔原因として有力視されている「イネカメムシ」については、県農業経営課・農業技術センター・病害虫防除所と協力して発生実態調査を行っている。現在までに、コシヒカリ等早く出穂した水田に侵入した越冬成虫が産卵し、ほ場内でふ化した幼虫が成長する様子が確認された。この後、出穂の遅い水田へ移動するか調査を進める。

今後、カメムシ吸汁痕調査と併せ、不稔がカメムシかその他の要因によるものか特定を進めることにより、次年度の対策を容易に行うことを目指している。



【関係者協力によるカメムシ等調査】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

揖斐農林■沢あざみ 沢あざみを囲む会を開催

7月27日、揖斐川町かすが保健センターで飛騨美濃伝統野菜「沢あざみ」を囲む会を実施した。

第一部は料理研究家の山川潤子（やまかわじゅんこ）講師を迎え、手軽にできる若者向けの沢あざみ料理3品を実習した。第二部では、生産者、地域おこし協力隊員、関係機関により、今後の振興について検討した。飛騨美濃伝統野菜である沢あざみが栽培されている春日地域には、この地域だけで栽培されている在来農産物が数種類ある。それらの農産物及び沢あざみを伝承する方法について話し合った。

今後は地域の在来農産物の調査を進め、年内に飛騨美濃伝統野菜の認定申請を行う予定である。



【料理実習】